

伝福岡県及び高知県岩滝出土の細形銅剣

石 川 日 出 志

I はじめに

ここに紹介する細形銅剣2例は、明治大学考古学陳列館（現博物館）が1962年度に購入した資料で、A-123・A-124という資料番号が付されている。A-123は高知県岩滝出土例で、すでに岡本健児氏が『考古学雑誌』第43巻第2号に実測図とともに報告されている^{註1}。A-124は福岡県内出土と伝えられる例で、『明治大学考古学陳列館案内』1962年・1968年・1977年・1982年版に写真掲載された資料である。

弥生時代青銅製武器の研究はすでに長い歴史と成果の蓄積があるが、1980年には岩永省三氏による緻密な型式分類と編年に関する研究成果が公けにされ、とりわけ朝鮮半島からの舶載品と日本列島での仿製品との識別は飛躍的に前進し、また、従来舶載品とみてきた細形型式の武器の鋳型が最近北部九州で確認されるなど、ここ数年研究の深化・進展には目をみはるものがある。本稿では、すでに報告済みの例を含めて明治大学考古学博物館が所蔵する2例の細形銅剣を図化・計測し、類例との比較検討を行った際に気づいた点について触れることとする。

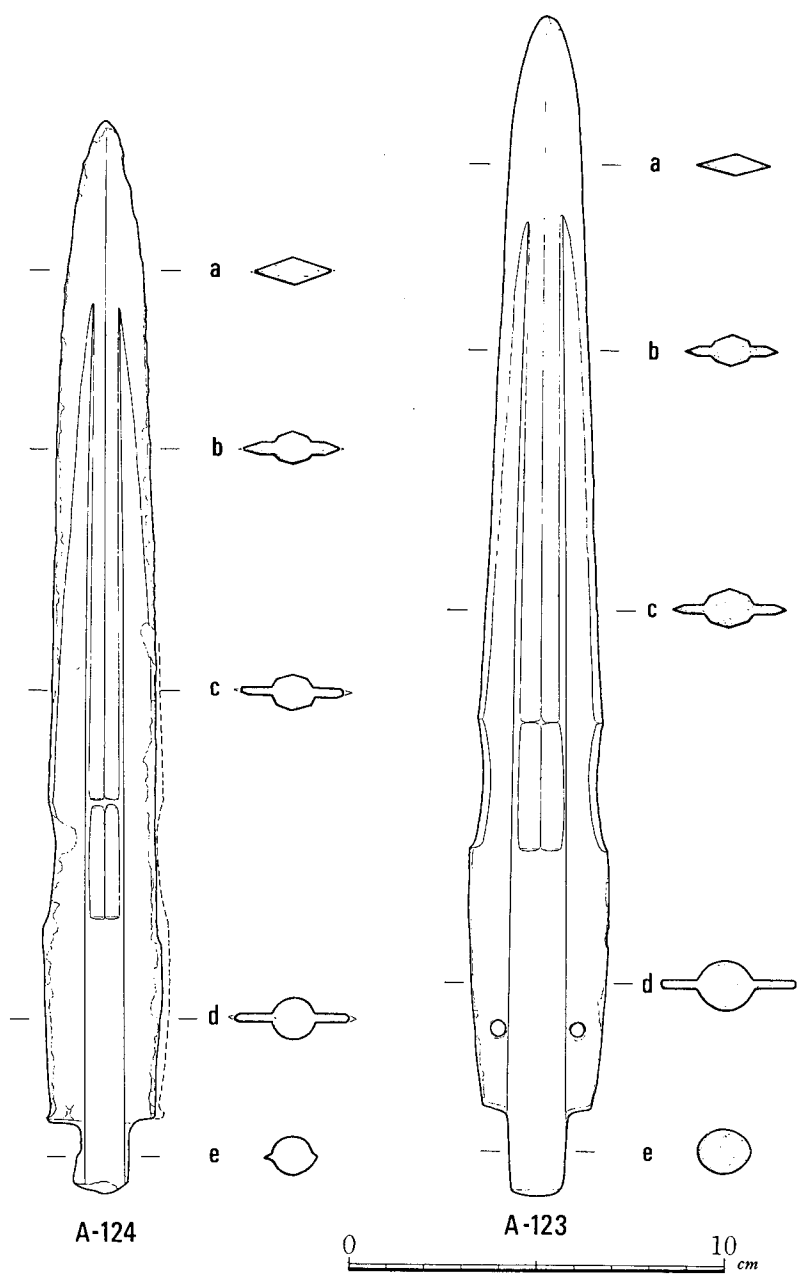
II 資料の概要と型式認定

A-123 岡本健児氏の報文によると、高知県吾川郡伊野町八田字岩滝、通称不動ヶ下で、地主の産田豊吉氏が水田を掘り下げたところ、地表下20~45cmから茎を上、剣先を下にしてやや斜めの状態で出土したもので、周囲にはこれと関連する遺構・遺物はなにも発見されなかった。また、発見地の旧地形は山麓の傾斜地の末端にあたるという。

銅剣の主な計測値は次のとおりである。

a 全長……………31.7cm	f 刃方以下の背幅……………1.5cm
b 茎長……………2.1cm	g 刃方上端の身幅……………3.3cm
c 剣身長（全長－茎長）……29.6cm	x 値（d／c）……………0.243
d 刃方以下の身の長さ…………7.2cm	y 値（e／f）……………2.533
e 刃方以下の最大身幅…………3.8cm	重量……………339g

銅剣は全長31.7cmの完形品で、縁辺に微細な剥落がみられるだけで遺存状態も良く、黒味をおびた濃緑色を呈している。茎は中央部で幅1.47cm、厚さ1.14cmをはかる。鋳型の合せ目に生じた甲張りは完璧に研ぎ落され、茎全周にも研ぎが加えられて下端にむけて少し細くなる。茎下端面も丁寧に研磨されて鋳上り面はほとんど除去され、丸味をもっている。関は斜めに直線状をなし、左右とで形状が異なる。剣身には剣先から刃方まで刃部が研ぎ出され、これにともなって背にも刃方部まで鑄が生じている。刃方上端背上には十字形の鑄が生じ、その交点が小さな曲面となっているが、この部位をはじめ剣全体に磨滅がみられ、これを研磨時に生じた曲面と断ずるのは難しい。また、刃部を研ぎ出す際に生ずる擦痕は、この磨滅によってほとんど消失している。刃方以下の葉部側縁は研磨されて断面形が丸味をもっている。関から約2cm上の背両側には両面から穿孔された双孔があり、直径4×3.5mmとやや縦長の平面形を呈している。剣柄緊縛用の紐孔であろうが、孔内に磨耗はみられるものの紐ずれ痕らしく孔下方に磨耗が集中するわけではない。剣葉部の厚さは断面dの縁辺で2.4mm、背の脇で2.5~2.7mmと背側がわずかに厚く、また、刃方部で2.4mm、断面cで2.2mm、断面bで2.6~2.7mm、断面a・b間で3.2~3.5mmと、剣先にむかうにしたがって厚味を増す。背幅



第1図 明治大学考古学博物館蔵 A-124 (伝福岡県内出土)・
A-123 (高知県岩滝出土) 銅剣夷測図 (S = 1/2)

は、断面 d で 15.3mm, c で 13.0~13.2mm, b で 11.1~11.2mm, 背の厚さも断面 d で 13.7mm, c で 10.6mm, b で 8.1mm と、幅・厚さとも剣先にむかって値を減じていく。

A-123 (岩滝例)の型式帰属については、岡本氏は細形、杉原莊介氏は中細形に含めたが、岩永省三氏の分類基準に従えば細形銅剣 Ia 式に属す。日本出土 Ia 式銅剣のうち、剣身長がわかる、もしくは推定復元しうる例をみると、27cm 台を境としてそれ以下の一群 (22~27cm) とそれ以上の一群 (28~35cm) とがあり、刳方以下関部まで背上に鑄がはいる II b 式、朝鮮半島出土の Ia 式でも同様の傾向があり、このうち岩滝例は大形の一群に含まれることとなる。岩滝例に剣身長が近く、形状もよく似た例として、佐賀県宇木汲田 K11・山口県梶栗浜出土長府博物館蔵第 1 例・福岡県須玖岡本 K15・同 B 地点付近出土例などがある。このうち宇木 K11 と梶栗浜の 2 例は刳方の位置まで酷似しているが、茎長や剣先長にわずかの違いがあって同一鑄型の可能性を考えるまでには至らない。また、高知県姫野々三島神社旧蔵品は II b 式と別型式ながら、刳方上端の位置と剣先長にわずかの違いがあるだけである。これまでに出土した鑄型にはこれに近い例はみあたらない。

A-124 購入時の箱書には「福岡県志賀島叶崎出土」とあるが、これを事実とみる根拠はない。従来どおり伝福岡県内出土例としておく。計測値は次のとおりである。

- a 全長……………現存値 28.8cm (復原値 29.0cm)
- b 茎長…………… 1.9cm
- c 剣身長 (全長 - 茎長) ……現存値 26.9cm (復原値 27.1cm)
- d 刳方以下の身の長さ…………… 5.3cm
- e 刳方以下の最大身幅……………現存値 3.2cm (復原値 3.5cm)
- f 刳方以下の背幅…………… 1.2cm
- g 刳方上端の身幅……………現存値 2.8cm (復原値 3.2cm)
- x 値 (d / c) ……………復原値 0.196
- y 値 (e / f) ……………復原値 2.917
- 重量…………… 242g

剣身の側縁がほぼ全周にわたって剝落しているが、全形を復原するのに支障はない。図示した A 面は遺存が良好なのに対して、裏側の B 面は剣先から刳方付近にかけてブロンズ病が生じて表面の剝落や膨らみがみられる。色調も A 面が深黄緑色が基調なのに対して、B 面は深緑色を基調とする違いがあり、緑青も B 面に限られる。こうした A・B 両面の遺存状態の違いは、A・B 両側の埋没環境が微妙に異なったことに由来するものとみられ、たとえば甕棺内で甕棺に密着した面とそうでない面との差などが想起される。

茎は鑄放ったままで、甲張りや茎下端の鑄上り面は研ぎ落されずにそのまま残っている。茎の厚さは 1.0cm であるが、その幅は A 面が 1.1cm, B 面が 1.2cm と 1mm 余の差があって、断面 d 右側に図示したように鑄型のずれが甲張り状に鑄出されている。剣身には剣先から刳方まで刃部が研ぎ出され、背にも刳方まで鑄が生じている。刳方以下の葉部側縁にも刃部状の研ぎがあるものの、背に研ぎが加わらないことからわかるように、側縁断面の角度は刳方以上の刃部よりも大きく、刃部というよりも側縁の整形の一種とみなされる。しかし、側縁の仕上りと刳方以下の形状は、刳方以下まで鑄がはいる II b 式とよく似ている。刳方上端の背上には十字形の鑄がはいるが、A 面では剣先側と刳方側の研磨面が離れ、B 面ではこれが接している。これらの研ぎがみられない葉部や背には鑄型の整形時に生じた長軸方向の擦痕が痕跡的ながら鑄出されている。また、A 面の左側関付近には鑄型の傷もみえる。葉部の厚さは、断面 d で 2.0mm, 断面 c で 2.1~2.2mm, 断面 b で 3.5~3.7mm と剣先にむかって次第に厚くなり、逆に背は断面 d で 11.2mm, c で 9.9mm, b で 9.0mm, a で 7.0mm

と厚さを減じていく。背幅は断面dでA面11.7mm・B面11.8mm, cでA面11.5mm・B面11.1mm, bで両面とも9.7mmあり, 断面c付近から剣先にむけて幅を狭めていく。

伝福岡例も岩滝例と同様に, 背上の鑄が刃方までの細形銅剣I a式であるが, 伝福岡例は刃方以下の側縁への研ぎが著しく刃部状を呈し, 顕著な研ぎによって関部が左右に突出していて, 背上に鑄がない点をのぞけばII b式に似ている点に特色がある。日本出土で同様の例には福岡県比恵SK128がある。剣身長26.9cm(復原値27.1cm)であるから細形銅剣I a式のなかではより小形の一群に含まれる。剣身長がほぼ等しい福岡県井原赤崎・御廟塚・松浦史料博物館蔵伝壹岐例の3例は, いずれも伝福岡例よりも背幅が広い。春日市大谷遺跡の細形銅剣鑄型も近似するが, 図面を重ね合せてみると, 伝福岡例の関の突出部が鑄型の剣形よりも外側に突出してしまい, 鑄型と製品という関係はなりたたない。

A-123・124という2例の銅剣は, 細形銅剣I a式に含まれ, それぞれより大形, より小形の一群に属し, 近似例は数例あるものの同範の疑いある例は現在までのところ見あたらない。

III 細形銅剣と中細形銅剣について

弥生時代青銅製武器の型式分類に関する研究は, 「一見して仿製品とわかる最後出型式が最初に認定され, 次第に仿製型式の枠が拡大されるという経過を辿ってきた」。^{註6} 舶載品と仿製品との識別を仔細に追究した岩永氏は, 仿製品と認定するための規準を明らかにする一方で, 確実に仿製品と認定できるものを中細形以後とし, 細形の中には舶載品・^{註7} 最初期仿製品の可能性あるもの, いずれか判断がつかないものを含めるという慎重な態度をとった。ところが, 福岡県大谷遺跡や佐賀県姉遺跡・惣座遺跡から鑄型が出土したのを契機として福岡県志賀島勝馬遺跡の鑄型も再検討され, 従来舶載とみて細形としてきた青銅製武器が実は北部九州でもすでに製作されていたことが判明するに至って, 北部九州製の細形型式を「^{註8} 国産(仿製)品」として舶載品とは区別するべきであるとの主張もなされるようになった。^{註9}

確かに朝鮮半島製と北部九州製とを型式学的に識別する努力は今後とも続けるべきであろう。しかし, 鑄型の発見によって北部九州で製作されたことが判明したものをただちに細形型式から分離すべきではなかろう。それが朝鮮半島製の型式的特点をそのまま備えていれば細形とし, 半島製とは異なる型式的特点を備え始めたものから中細形とすればよい。ここでは中細形から仿製品といえる。

それでは細形銅剣と中細形銅剣の実際はどうであろうか。岩永氏は, 仿製品では刃方以下の幅が拡大することを重視し, これに刃方以下の長さの拡大をも加味して, 銅剣の法量比率をもとに細形と中細形を分離することに成功したが, それとともに剣身長32cm以下のI式剣の中でも第一次仿製品とみられるI b式を抽出して舶載品のI a式から分離した。^{註10} I b式には佐賀県瓢箪塚下・上滝・香川県藤ノ谷(2例)の4例が該当するが, これらを見ると, ①刃方以下の身幅が拡大したものの刃方上端の身幅が拡大しないために, 両者の差が目立つ, ②刃方以下が長めであるとともに両側縁が平行しながら直線的にのびる, という特徴がある。①は中細形a～c類に著しく, 有柄式の山口県向津具例も同様で, ②は中細形a類に共通し, 岩永氏がI a式としながらも仿製の疑いありと記した岡山県飽浦山本ノ辻例も同様で, いずれも朝鮮半島にはみられないようであるから仿製品とみてよい。これらは細形銅剣I a式から型式変化をとげたものであることは明らかであるが, I a式と同様に大形・小形の二群があって, このうち大形の部類にはいる藤ノ谷(2例)・飽浦・向津具(剣身)の直接の祖型としては, 岩滝例をはじめとするさきあげた一群が最も相応しいように思われる。岩滝例と同類とみられる例は日本列島内だけでなく, 慶尚北道上新洞・洛東里・忠清北道など朝鮮半島においても認められるから, 両者を区別する型式的特点が把握できない限りはいずれ

も細形銅剣としておくべきであろうが、もし岩永氏のⅠb式という仿製品の製作と併行して、もしくは先んじて北部九州においても細形銅剣が製作されたのであれば岩滝例の如き一群がその第一候補となる。

なお、朝鮮半島においては剣身長32cm以下の例がほとんどであるが、Ⅰa式直前型式かとも思える東西里2号剣・Ⅰa式でも古相を呈す美林里例・Ⅰa式で有樋の沙坪面・Ⅱb式の入室里4号剣など各型式にわたって32～35cmの例がみられるから、福岡県春日原キャンプ・板付田端・吉武高木K117・樋渡K75の各例が32～35cmであっても細形銅剣として矛盾するわけではない。

北部九州においては遅くともⅠb式から銅剣の鑄造が開始されているとみられるが、他の青銅製武器とともにそれら仿製品は朝鮮半島内で独自に発展したものから型式変化をとげたもので、その間の型式変化は相当にスムーズである。一方、近畿地方を中心に発達した銅鐸は朝鮮式小銅鐸を祖型としながら全く新しい形式として成立している。この差異は、銅鐸と朝鮮式小銅鐸をつなぐものの発見によって縮少するものか、それとも両地域における青銅器製作という高度な技術の到来とその受容をめぐる質的な違いを示すものか、大いに関心がもたれる。

註

- (1) 岡本健児 1957「再び土佐国出土の細形銅剣新資料」『考古学雑誌』第43巻第2号 pp. 59—61
- (2) ④ 岩永省三 1980「弥生時代青銅器型式分類編年再考—剣矛戈を中心として—」『九州考古学』第55号 pp. 1—22, ⑤ 岩永省三 1980「日本青銅武器出土地名表」『青銅の武器—日本金属文化の黎明—』pp. 51—145
- (3) 小田富士雄 1985「銅剣・銅矛国産開始期の再検討—近年発見の鋳型資料を中心として—」『古文化談叢』第15集 pp. 226—265
- (4) 杉原荘介 1972『日本青銅器の研究』中央公論美術出版, ほか。
- (5) 横山邦継 1983『比恵遺跡』福岡市教育委員会
- (6) 註2文献④ p. 1
- (7) 註2文献④
- (8) 「国産」という語を、弥生時代研究に用いるのは肯けない。
- (9) 柳田康雄 1986「北部九州の国産青銅器と共伴資料」『埋蔵文化財研究会第20回研究集会・弥生時代の青銅器とその共伴関係』第4分冊 pp. 4—18
- (10) 岩永氏の型式分類方針に基づけば、中細形とすべきであろう(註2論文④註15)。「中細」という語意よりも分類方針を優先したい。
- (11) 榎本杜人 1980『朝鮮の考古学』同朋舎 p. 415 №199
- (12) 唐津湾周辺遺跡調査委員会 1982『末盧国』六興出版 p. 724 №4
- (13) 註11文献 p. 415 №204
- (14) 池健吉 1978「礼山東西里石棺墓出土青銅一括遺物」『百済研究』第9輯 pp. 151—181
- (15) 註11文献 p. 415 №194
- (16) 註11文献 p. 415 №201
- (17) 梅原末治 1947『朝鮮古文化綜鑑』1, ほか。
- (18) 福岡市教育委員会 1986『吉武高木—弥生時代埋葬遺跡の調査概要—』